

## Edwin Williams: *Representation Theory*

Cambridge, Mass.: MIT Press, 2003. x+285 pp.

---

村田 明

---

### 1. 理論の概要

表題書で述べられている理論を RT (表示理論 Representation Theory) という。ミニマリストの考えの下での経済性は、移動規則を適用する場合、移動距離を最小にする、あるいは、移動回数を最小にするというようなものになる。RT は、表示レベル A における表示 a と表示レベル B における表示 b が形状保存の原則 (Shape Conservation) に従うという新たな経済性概念によって、いくつかの言語現象に対してミニマリストの下ではできなかったより一般的な説明を試みている。ミニマリストの下では規則被適用要素あるいは被適用範囲についてしか表示の特徴を述べることができないうが、RT の下では経済性を保ちながら表示全体について表示の特徴を述べるができる。

形状保存の原則に従うといっても各表示レベルにはそのレベル固有の表示特性があるので、レベル間の表示は厳密には、同形異質 (Isomorphism 以後、同形性という) である。同形性要求は各表示レベルまたは隣接表示レベルの表示条件を満たすことによって代償 (平たくいえば、緩和) され、レベル間に不整合があっても、それは、形状保存の原則によりもっとも同形性を保持する表示が選択された結果なのである。

移動にはレベル間移動とレベル内移動の 2 種類があり、文字通りの移動は後者で、前者は形状保存の原則に従った表示間の不整合として現出したもので、Williams はかきまぜ (scrambling) と呼んでいる。

## 2. RT による説明例

### 2.1 不適正移動 (Improper movement) の禁止

RT では、文はレベル埋め込み理論 (Level Embedding Conjecture 以後、LEC という) によって構築される。文の階層構造は、主要部が補部に対して下位範疇化されているという主要部の語彙情報に基づいて、前者が後者を埋め込むことによって作られる。RT がミニマリストと異なる最大の特徴は、被埋め込み要素の種類によって埋め込まれる表示レベルが異なるということである。厳密循環の原則や Chomsky (1995) で主張されている拡張の原理は、後者に似た「統語操作は構造の周辺 (the periphery of the domain) に作用しなければならない」という原則 (以後、周辺操作の原則) によって踏襲され、例えば不適正移動の禁止現象は規定せずとも、RT の理論内容から当然の帰結として導かれる。

ここでいう RT の理論内容というのは、表示レベルに順番が規定されているということで、これによって、LEC によって構築されていく文構造は単純な積み上げ構造ではないことになる。

(1) 表示レベルの順番と各表示レベルで埋め込まれる要素

Theta Structure (TS): VP  $\leftarrow$  Case Structure (CS): IP  $\leftarrow$  Surface Structure (SS): CP

$\alpha \rightsquigarrow \beta$  は  $\alpha$  が  $\beta$  を形状保存の原則に従って表示しているという意味である。不適正移動の禁止現象というのは、Williams の比喩をそのまま使えば、従属節の 2 階 (CP 指定辞の位置) から母型節の 1 階 (IP 指定辞の位置) への移動は許されないとすることである。CP が埋め込まれるのは SS, IP が埋め込まれるのは CS であり、後者が前者より先に順序付けられているから、周辺操作の原則によって、CP 指定辞の位置から IP 指定辞の位置へは移動できないことになる。

### 2.2 照応形

不適正移動は従来 A' 位置から A 位置への移動とされていたが、これは、A/A' 位置の区別が主語とか目的語の位置というふうに表示レベルの違いとは関係なく定義されていたのでその様に規定できたのである。RT では、そもそも

項の定義がレベルによって異なるので、全てのレベルを通じて共通の A/A' 位置の定義はできない。つまり、A/A' の区別は、項がレベル  $R_1$  で占める位置がレベル  $R_{i+1}$  で占める位置に対してその位置がそのレベルで A/A' 位置のいずれであるかを考慮に入れて、決まるという風にレベル間で相対化されたものであるので、レベル間にわたる文法現象を述べる場合に、単純に A/A' の区別を利用することはできない。たとえば束縛理論では、照応形は A 束縛される要素として規定されているが、RT ではそのように規定することはできない。

さらに、(1)からわかるように、RT では表示が右へ進むにつれて表示に取り込まれる要素が増えていく。このことは各表示レベルで導入される照応形がそのレベルで先行詞を持たなければならないとすると、照応形の導入レベルが右へ行くほど潜在的に先行詞となりうる要素の存在範囲が増えていくことを意味する。また BT (Binding Theory) の適用レベルが CS と SS の間にあるとする (Williams はそのレベルを PS (Predicate Structure) といっている) と、レベル間移動であろうとレベル内移動であろうとそれがレベル SS 以後のものであれば、照応形束縛に関する再構築効果が見られることになる。従来述べられてきた照応形の 3つの性質、先行詞が近くにあること(局所性)、先行詞によって束縛されること(再構築性)、先行詞が A 位置にあることが RT の下では当然の相関現象として現れてくる。

実例を使って具体的に見ていこう。

- (2) a. Mary hopes that John will think that pictures of herself are in the post office.  
 b. \*Mary hopes that John believes pictures of herself to be in the post office.

英語における照応形は導入されたレベルに可能な先行詞があればそれを先行詞とする。また、BT は、照応形にたいしてその先行詞を決定する際に、主語が不透明領域を作ると規定している。(2a)にある照応形は、PS レベルではまだ CP 埋め込みが行われていないのでそこで先行詞を見つけることができない。その場合、この照応形は PS 照応形として先行詞を持たず、文は非文法的となるか、SS 照応形として CP 埋め込みが行われてから先行詞を捜すかのどちらかであ

る。(2a)の場合、後者の選択が可能であり、しかも、SS レベルでは BT の主語による不透明領域は作られないので Mary を先行詞とすることができる。一方、(2b)にある照応形は、PS レベルでは既に IP 埋め込みがなされているので BT により John を先行詞としなければならず、非文法的となる。

### 2.3 優位現象と移動

RT における文字通りの移動は SS レベルで起こる wh 移動だけで、その他の一見移動に見える現象はレベル間の不整合によるかきませである。wh 移動がかきませでないのは、多重 wh 構文における wh 句の依存現象を説明するために、2種類の移動を認める必要があるからである。

- (3) a. Who bought what?  
 b. \*What did who buy?  
 c. John knows who bought what.  
 d. \*John knows what who bought.  
 e. Who knows what who bought?

従来の優位現象の説明(簡単にいえば、what が who を越えて移動できないという説明)の観点からすると(3e)が文法的であるのは驚くべき事実である。このような構文は wh 句の間に、wh 痕跡を独立変数(Independent variable)、wh in situ を従属変数(Dependent variable)とする関数的依存関係があり、この関係が成立するためには独立変数が従属変数を関数(非同一指示)束縛し(functionally depend)なければならない。独立変数を作る wh 句が従属変数を交差して移動した場合には関数束縛が成立しないので、(3b, d)は非文法的であるが、(3e)では主節 who の痕跡が独立変数となり、従属節の who を関数束縛する。

(4)はブルガリア語の多重 wh 疑問文(英単語を使って語順だけを問題にする)である。

- (4) a. who whom what Aux asked?  
 b. who what whom Aux asked?  
 c. \*what who whom Aux asked?

3つの wh 句が wh 移動して who だけが独立変数として解釈できる。この事実は、独立変数となる wh 句だけが wh 移動し、さらにブルガリア語(日本語も)では関数束縛が wh 移動が起こる前に (PS で) 確立すると考えることによって説明できる。

(5) PS : who (独) Aux asked whom (従) what (従) —かきませ→

SS : whom what who Aux asked—wh 移動→ who whom what Aux  
asked

wh 移動のない日本語の例(6)も同様に説明される。

(6) a. \*太郎がなぜ何を買ったの。

b. 太郎が何をなぜ買ったの。

c. 誰がなぜ何を買ったの。

「なぜ」は独立変数にならない疑問詞であるが、CS 語順を示す(6a)では「何を」が「なぜ」を関数束縛できない。一方、「何を」をかきませで移動させた(6b)は PS 語順であり関数束縛がここで成立する。(6c)では「なぜ」は「誰が」に関数束縛された従属変数である。

### 3. 「表示レベル」の検討

見てきた現象以外にも、派生形態論、屈折形態論、意味論と統語論の表示関係などで RT は斬新な理論展開と言語事実の予測を可能にしている、さらなる発展への興味が湧いてくる。しかしながら、それだけに、RT を構成している理論概念への批判的検討が厳しくなされるべきだと感じられる。中でも、RT のもっとも基本概念の1つである表示レベルとは何であるのかを検討すべきである。2つの観点から検討できるのではないだろうか。1つは、言語現象を表示のゆがみと捕えることに納得はできても、複数の言語現象が1つの表示レベルのゆがみに収束するとした場合、なぜそうなるのかということは自明ではないという観点。例えば、照応形の文法性を判断する際に BT は PS で適用している。また、p. 87 で VP 削除現象は PS の特性で説明できるであろうとしている。この2つの現象が PS 表示という1つの形の中に現れているのは単な

る偶然なのだろうか。

もう1つは文構築方式と表示レベルの関係から見た場合の後者の意味合いである。ミニマリストの文構築の方法を積み上げ拡張方式とすると、RTのそれは埋め込み拡張方式といえるであろう。RTはこの方式と表示レベルを関係付けることによって独特の経済性の概念の提示に成功しているが、ある要素があるレベルで埋め込まれるのはなぜなのかということは自明ではない。要素と表示レベルの関係から個々の表示レベルがもつ意味合いを明らかにするべきであろう。

#### 参考文献

Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.